

続日本紀におけるカメ献上記録17例

後藤康人

133-0056 東京都江戸川区南小岩5-21-11-503 えどがわ生物懇話会

17 record examples of tortoises listed in "Shoku Nihongi(続日本紀)".

By Yasuhito GOTO

EDOGAWA Social Meeting on Biology, 5-21-11-503 Minamikoiba, Edogawa-ku, Tokyo, 133-0056, Japan.

1. はじめに

古来よりカメは縁起の良い存在とされ、かつては特異な個体が見つかるしょうずいと祥瑞、つまり吉兆として朝廷へ献上されることがあった。例えば江戸時代後期の尊皇思想家である高山彦九郎(1747-1793)は、緑毛亀もつき みのがめ(蓑亀)を献上したことがきっかけで光格天皇(1771-1840)に拝謁したことが歴史好きのあいだで知られている。本稿では8世紀から10世紀初頭にかけて編纂された6つの正史(日本書紀、続日本紀、日本後紀、続日本後紀、日本文徳天皇実録、日本三代実録)、いわゆる六国史の中から、カメの献上記録が最も多い続日本紀の17例を抽出し、その内容を検討した。

2. 続日本紀とは

続日本紀は日本書紀に続く六国史の2番目にあたる勅撰史書である。神話の時代から始まり持統天皇(645-703)までを記した日本書紀に続き、文武天皇(683-707)の元年(697年)から桓武天皇(737-806)の延暦10年(791年)までの95年間で記されている。完成は延暦16年(797年)。撰者は菅野真道、藤原継縄、秋篠安人、ほか。編年体(時系列に出来事を記す形式)、漢文表記で、全40巻の構成となっていて、現代では奈良時代研究のための基本史料とされる。

3. 祥瑞思想(カメが献上された理由)

祥瑞思想は古代中国から伝わったもので、為政者の徳が天下に広まれば天が何らかの徴しるしを顕わすという考えである。徴は森羅万象が対象となり、現象によってランク分けされ、白い動物、特に白亀の出現が大瑞に値する吉祥とされた(例えば福原,1974や茂木,2005)。続日本紀の時代には特異なカメが出現し、それが朝廷へ献上されたことを契機とする祥瑞改元れいき じんき てんびょうが、靈亀(715-717)、神亀(724-729)、天平(729-749)、宝亀(770-781)の4回も行われている。日本の元号で亀の字が用いられたものは前述のうちの3例に加え、文亀(1501-1504)、元亀(1570-1573)の計5例であるが、後者ふたつの元号はカメの出現に因るものではない。続日本紀の時代は、日本史上を通じて、最もカメがヒトに大きな影響を及ぼした時代だったといえるかもしれない。

4. カメ献上記録17例の内訳

続日本紀のカメ献上記録17例(計17個体)に関する記述を別表にまとめた(表1)。内訳はスッポンが1例、残り16例がカメ(淡水棲カメ)で、以下の①から⑤のパターンに分類できた。

表1. 続日本紀におけるカメ献上記録17例

事例	西暦(元号)	記事日付	在位天皇	献上国	献上者	発見者	捕獲地	個体についての原文記述	備考
01	697(文武元)	9月10日	文武	近江	—	—	—	獻白鱉	「鱉」=「鼈」
02	700(文武4)	8月3日	文武	長門	—	—	—	獻白龜	
03	715(靈龜元)	8月28日	元正		高田首久比麻呂	—	—	獻靈龜 長七寸 闊六寸 左眼白 右眼赤 頸著三公 背負七星 前脚並有離卦 後脚並有一爻 腹下赤白兩點 相次八字	靈龜改元
04	723(養老7)	9月7日	聖武		紀朝臣家	—	—	獻白龜 長一寸半 廣一寸 兩眼並赤	神龜改元
05	726(神龜3)	1月2日	聖武	大倭	—	—	—	獻白龜	
06	729(天平元)	6月20日	聖武		藤原朝臣麻呂等	—	河内国古市郡	獻龜 長五寸三分 闊四寸五分 其背有文云 天王貴平知百年	天平改元
07	745(天平17)	10月28日	聖武		尾張王	—	河内国古市郡	得白龜一頭 長九分 闊七分 兩目並赤	
08	752(天平勝宝4)	1月1日	孝謙	大宰府	—	—	—	獻白龜	
09	753(天平勝宝5)	11月2日	孝謙	尾張	—	—	—	獻白龜	
10	768(神護景雲2)	7月11日	称徳	日向	—	大伴人益	宮崎郡	獻白龜赤眼	
11		9月11日		肥後	—	形部広瀬女	葦北郡		
12	770(宝龜元)	8月5日	光仁	肥後	—	日奉部広主女	葦北郡	獻白龜	宝龜改元
13		8月17日		—	—	山稻主	益城郡	獻白龜	
14	772(宝龜3)	10月11日	光仁	肥後	—	家部嶋吉	葦北郡	獻白龜	
15					—	高分部福那理	八代郡	獻白龜	
16	775(宝龜6)	4月13日	光仁	近江	—	—	—	獻白龜赤眼	
17		9月15日		河内	—	—	—	進白龜	

- 17例の内訳: ①白いスッポン 1例 (表の事例01)
 ②白いカメ 9例 (表の事例02, 05, 08, 09, 12, 13, 14, 15, 17)
 ③赤い目の白いカメ 5例 (表の事例04, 07, 10, 11, 16)
 ④背甲に文字のあるカメ 1例 (表の事例06)
 ⑤虹彩異色の謎のカメ 1例 (表の事例03)

①は原文では「鱉」という字が用いられていた(鼈の異体字である). 龜もしくは亀とは書かれていない. 明らかにスッポンである. ②は白変個体と思われる. ただし, 体色の薄いものなどが含まれている可能性もあるだろう. ③はアルビノ個体と思われる. ④は政治的な背景があったことが疑われる(原文は「其背有文云 天王貴平知百年」. ここから天平という元号になった). おそらく何者かが甲羅に手を加えたものではないか. ⑤はネコではオッドアイ(odd-eyes)が知られるが, カメにおいて出現するかは不詳. その他の特徴に関する記述(七星を背負う, 腹下に赤白の両点が相次いで八字になっている, など)からも実態が分からない謎の個体である.

5. 考察

スッポン以外のカメ16例において記述内容からは確実に種同定できるような情報は見出せなかった. 当時の本州や九州の淡水棲カメの生息状況を想定すれば, それらはおそらくニホンイシガメと考えるのが妥当と思われる. ただし, 現生の筆者の身の回りでニホンイシガメのアルビノの出現は寡聞にして耳にしない. 続日本紀の95年間で5例を数えたことはたいへん興味深い. また, 意外なことに緑毛亀(蓑亀)は含まれていなかった. 緑毛亀は本草綱目(李時珍, 1596)に詳しく述べられているが, 続日本紀の時代には存在が知られていなかったか, あるいは貴重とする考えそのものが無かったのかもしれない.

参考文献

- 青木和夫・稲岡耕二・笹山晴生・白藤禮幸(校注). 1989-1998. 新日本古典文学大系12-16 続日本紀(1)-(5). 岩波書店, 東京.
- 福原栄太郎. 1974. 祥瑞考. p1-30. ヒストリア(65). 大阪歴史学会.
- 茂木直人. 2005. 地方における祥瑞の意義. p75-95. 日本古代の鄙と都. 岩田書院, 東京.
- 六国史. <http://www.j-texts.com/sheet/rikkoku.html>
- 六国史データベース. <http://www013.upp.so-net.ne.jp/wata/rikkokusi/>
- 宇治谷孟. 1992-1995. 講談社学術文庫 全現代語訳 続日本紀(上)(中)(下). 講談社, 東京.